

(2) 訪問学級Kさんの事例

①活用前の様子

座位保持いすに座れるのは、一日のうちで40分間(呼吸の負担が生じるため)という身体的制約があるが、人とかかわろうとする意欲や学習意欲も高い。24年度末より、少しずつiPadに親しみ始め、すぐに興味を持ち、触りたがっていた。

②AT・ICT活用導入と組織改編・研修との関連について

ベッドサイドでは、ビデオカメラやパソコンは扱いにくさに加えて、児童生徒にとって見えにくく、触りにくいものであった。担任も機器等には決して詳しくなかったが、「とりあえず触ってみたら。」という情報課の教員のアドバイスを受け、スイッチを入れるところからのスタートだった。

ビデオ活用が多いため、撮った映像をそのまま保存し、学習のみならず保護者面談や入所している施設内の連絡会等でも活用したいという担任としての希望を情報課に伝えた。訪問学級用に使用端末を固定するという配慮と調整があったことで、活用の幅が広がった。

そのことに対して、担任はたいへんありがたいと感じた。

③活用の実際

1) 手段としてのタブレット端末の活用

元々、K君の姿勢や視線に合わせて、車椅子の背もたれや机の角度がうまく調整されていた。それに加えて、黒板や教科書の代替になるようにタブレット端末の提示の仕方を工夫した。端末保護ガードの裏のホルダーに右手を差し込んであるので、画面の向きは、状況に応じて、「見やすく、操作しやすい」ように臨機応変、即時に提示できる。現在、電源を入れるところから自分が使いたいアプリの起動、その操作を一人で行うことができる。活動を即時に映像に収め、すぐに形成的評価を返すことができるのも有効であった。

2) 本校の友達とのつながり、学習の共有への活用

訪問学級は、学級と言っても個別の指導になってしまうことが多く、学級を意識する機会が少ない。そこで、担任は、個をつなぐために、例えば、タブレット端末に授業の様子を映像で記録して、互いの学習の様子を見たり、伝え合ったりすることが有効ではないかと考え、様々な取組を行った。

一例を紹介する。本校との交流で授業を予定していたが、冬季、インフルエンザやノロウイルスが流行して、急遽、スクーリングが中止になった。しかし、担任が本校の授業をタブレット端末で記録し、その30分後には、施設内で同じ授業をすることができた。また、本校で開催された文化祭の実況中継をタブレット端末で行い、施設内にいながら同時に楽しむ取組などもあった。たとえ、共有する教室はなく、離れていても、仲間を意識することが可能になると考えられる。さらにネットワークが利用できる環境になれば、K君の可能性はもっと広がると考えられた。



図7 映像で授業をつなぐ様子

④活用後の成果と課題

成果としては、次のようなことが考えられた。

- 写真やビデオは、授業を振り返ったり確かめたりすることや訪問学級内の5人をつなぐこと、訪問学級と本校とをつなぐことができる有効なツールだと考えられた。
- タブレット端末は、他のスイッチ類と比べて「触れる」だけで操作できるため、重度・重複障害のある児童生徒にとっても「使えるツール」であると実感している。
- 側臥位、仰臥位等のような姿勢であっても活用できるため、「見ること」が困難であると思われる重度・重複障害のある児童生徒にとっても、提示されたものに注目する学習に有効であった。
- アルファベットの導入において、まずは教師が実演しながら伝え、生徒自身が自分で書いて学んでいくが、特に筆順練習については、プリント学習よりも有効だと考えられた。学習のどの場面で使えば効果的なのかを見極めると、文字獲得の近道となると実感した。

一方、課題としては次のような点が考えられた。

- タブレット端末の重量は、どの姿勢であっても、生徒がアプリを活用する際に一人で持ち続けることはきわめて困難である。本体を教師が支え続けなくてもいいようアームやスタンドといった周辺器具があると、生徒の身体的負担が軽減されるだけでなく、生徒自身の主体性および活用能力向上につながると思われる。26年度以降に整備を依頼する予定である。
- たくさん記録したデータを精選し、次年度に向けてよりよい引継ぎ資料としていきたい。
- 訪問教育と本校とリアルタイムでの授業を行うためには、ネットワーク環境の整備が望まれる。

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「B-292 特別支援学校（肢体不自由）のAT・ICT活用の促進に関する研究—小・中学校等への支援を目指して—」（平成26年3月）、81-82に記載された内容である。